



Title	韓国人日本語学習者の情報伝達行動におけるストラテジーの場面間切り換え : 分析のための枠組み試論
Author(s)	金, 道瑛
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2019, 53, p. 81-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓国人日本語学習者の情報伝達行動における ストラテジーの場面間切り換え

——分析のための枠組み試論——

金 道 瑛

キーワード：ストラテジーの切り換え／伝達ストラテジー／情報伝達行動／終助詞

1. はじめに

人は場面や相手などに応じてことばを切り換えることがある。ことばの切り換え研究はこれまで言語、方言、スタイルなど、幅広いレベルの事象を対象としてきた。一方、人は形式を切り換えるだけでなく、言語行動を行うためのストラテジーを切り換えることもある。たとえば情報伝達行動という同じ言語行動を行う際に、以下のように、相手によって使用することばを変える場合がある。

(1) 常連客「これ、何？」

店員「それはスイカですね。」

(2) 子どもの客「これ、何？」

店員「それはスイカですよ。」

この店員の発話は、単純にネとヨという形式を切り換えただけではない。ここでは、相手に情報を渡すその渡し方（ストラテジー）を切り換えている。このような切り換えの例は、同じ意味を表す形式の使い分けを分析する枠のなかでは切り換え研究の対象とはならなかった。本稿では、話者がある言語行動を行う際に、相手、場面などの要因に対応して行う能動的な発話構成の

ありかたをストラテジーとし、上の(1)と(2)の会話では、話し手が相手によってそのストラテジーを切り換えたものとする。

本稿では今後、韓国人日本語学習者(以下、韓国人)が日本語による「情報伝達行動」(後述)を行う際に、どのように伝達のためのストラテジーを切り換えるかを明らかにしていくための、分析の枠組みや分析の方法を検討する。そのストラテジーは、とくに伝達の様式形式に顕在化することが多いため、本稿では終助詞ヨ、ネ、ナの使用に注目する。

以下では、まず2節で本稿に関わる従来の研究を挙げ、問題のありかを述べる。続いて3節では使用するデータについて述べ、4節で本稿の目的である、情報伝達行動を分析するための枠組みと方法について整理する。5節で収集した談話データにその枠組みを適用した事例を示し、6節で今後の課題をまとめる。

2. 先行研究と問題のありか

ことばの切り換えは様々なレベルに渡って研究がなされてきた。まず言語と言語の切り換えを対象とするコードスイッチングの研究として、その切り換えの要因を探ったPoplack(2000)、Kite(2001)や、切り換えの機能を明らかにしたGumperz(1982)などが挙げられる。一方、日本語での丁寧体と普通体の切り換えを対象とするスピーチレベルシフト研究も蓄積されている。日本語母語話者を対象にした大浜・鈴木・多田(1998)、大津(2007)のほか、岡崎(2015)のように日本語母語話者と日本語学習者を比較したものなど、多様な観点から研究が進められてきた。一方、近年は、スピーチレベルシフト研究がデス・マス、尊敬語、謙讓語など、丁寧さを表す形式にのみ分析対象を限定していることを指摘し、語彙や文法形式の切り換えを幅広く扱う研究も行われている。たとえば『阪大社会言語学研究ノート』第4号から第6号(2002-2004)の「スタイル切り換え特集」などがそれである。

以上のように、従来の切り換え研究では言語、文体、語彙などの各レベルに渡り、その成果が蓄積されてきた。しかし、これまでの研究は同じ意味を

持つ形式にのみ焦点を当てており、同じ言語行動を行うための複数のストラテジーについては考慮されていない。個人が行うスタイル切り換えの全容を把握するためには、ストラテジーの切り換えも明らかにする必要がある。

本稿はその出発点として、韓国人が行う情報伝達行動（4.2参照）を取り上げ、当該言語行動を行う際に観察されるストラテジーの切り換えのありかたを明らかにするための分析方法を整理することを目的とする。

3. データ情報

本節では、以下で使用する、韓国人の談話データの概要について述べる。まず表1にインフォーマントの韓国人3名の情報を示す。調査は2018年6月から10月の間に行った。表の内容はいずれも調査時のものである。各インフォーマントはそれぞれ初対面場面、友人場面の2場面において、約30分間、自由に会話をを行った。それぞれの談話情報は表2の通りである。

表1 インフォーマント情報

	KF01	KF02	KF03
年齢（生年）	22歳（96年）	19歳（99年）	20歳（98年）
性別	女	女	女
日本滞在期間	4ヶ月	5ヶ月	2年6ヶ月

表2 談話収録情報¹⁾

	初対面場面			友人場面		
	初対面1 【F1】	初対面2 【F2】	初対面3 【F3】	友人1 【C1】	友人2 【C2】	友人3 【C3】
談話者	KF01-JF01	KF02-JF02	KF03-JF02	KF01-JC01	KF02-JC02	KF03-JC03
収録場所	カフェ	大学食堂	カフェ	大学 ラウンジ	大学食堂	大学 図書館

談話の文字化および発話の認定の方法は、宇佐美（2004）にしたがった。使用した記号の詳細は、稿末に示した。

4. 情報伝達行動の分析のための枠組みと方法

本節では、韓国人の行う情報伝達行動を分析するための枠組みと方法を提示する。4.1節でこれまでの言語行動（発話行為）の分類と本稿で取り上げる情報伝達行動の関係を整理し、4.2節で情報伝達行動とはなにか、あらためて定義する。続く4.3節では情報伝達行動をさらに4つのタイプに分類し、4.4節では情報伝達行動を行うためのストラテジーが形式的に顕在化する終助詞に焦点を当て、それぞれの終助詞が担うストラテジーを整理する。

4.1. 先行研究における情報伝達行動の位置づけ

サール（2006：19-32）では言葉と世界の間の適合方向²⁾及び発語内行為の目標を基準に、発語内行為を次の5つに分類している。

- ①断言型 (assertives)：話し手が、何かが事実であること、表現されている命題が真であることを表明する行為
- ②指令型 (directives)：話し手が、当の行為によって聞き手に何かを行わせようと試みる行為
- ③行為拘束型 (commissives)：話し手が、ある行為をするよう、話し手自身を拘束する行為
- ④表現型 (expressives)：話し手が、命題内容において特定される事態に関する話し手の心理状態を表現する行為
- ⑤宣言型 (declaratives)：話し手が、制度的に命題内容を真実にする行為

このうち、断言型 (assertives) は、「言葉を世界に合致させる」行為である。すなわち、すでに存在する世界（情報）を、ことばを通してそのまま表す（伝達する）ことであり、本稿の情報伝達行動はこの分類に属する。

4.2. 情報伝達行動とは

以上のように、情報伝達行動は、サール（2006）の断言型発語内行為に

属する。断言型発語内行為は「言葉を世界に」という適合方向を持っており、常に真か偽かが評価可能である（サール2006：20）点で指令型や行為拘束型とは明確に区分される。同様にして、情報伝達行動は表現型とも区別される。表現型は適合方向がなく、表現された命題が真であることが前提されている（サール2006：24）点で情報伝達行動とは異なる。したがって、表現型である感情や意見の伝達³⁾は情報伝達行動とみなさない。

一方、断言型発語内行為がすべて情報伝達行動になるわけではない。たとえば、真偽が判断できるような発話でも、独話的なものが有り得る。情報伝達行動は「相手に命題内容を伝達すること」が前提になるため、独話的な発話は情報伝達行動には含めない。

以上を踏まえ、本稿では情報伝達行動を、「聞き手への働きかけを伴わず、真偽判断が可能な命題を聞き手に伝達することのみを発話の目的とする言語行動」と定義する。

4.3. 情報伝達行動の下位分類

収録した談話データを見ると、情報伝達行動は2つの基準で下位行動に分類できる。一つは、情報伝達行動に自発性があるかないかである。話し手が相手の要求がなくても自発的に伝達する場合と、相手の質問、確認要求、または間違っただけと思われる発話など、相手の発話をきっかけとして情報を提供する場合である。もう一つは、情報が主要なものか付随的なものである。話し手が伝達する情報には聞き手に最も与えるべき主要情報と、先行発話を訂正したり、欠けている内容を補足したりする付随情報がある。まとめると表3のようになる（カッコの中は以下で使用される略称）。

表3 情報伝達行動の下位分類

	自発性+	自発性-
主要情報	①情報提示行動（《提示》）	②情報応答行動（《応答》）
付随情報	③自己情報修復行動（《自修》）	④他者情報修復行動（《他修》）

以下、それぞれについて、具体的に例示する。

①情報提示行動（《提示》）

話し手が談話の流れに沿って自発的に情報を伝達する行動である。その情報は、話し手にとっては最も伝達したい内容に当たる。

(3) 【F1】 情報提示行動

0123 KF01 来年の,,

0124 JF01 うん=。

→ 0125 KF01 =2月に、帰国します。

0126 JF01 あ。

JF01は帰国のスケジュールについて聞いていないが、KF01はそれを自発的に伝達している。以下、このような情報伝達行動を《提示》とする。

②情報応答行動（《応答》）

相手の質問・確認要求など、相手の要求に応じて情報を与える行動である。つまり、談話の相手にとって最も伝達してほしい内容に当たる。

(4) 【F1】 情報応答行動

0388 JF01 え、韓国は、学校何月スタート？。

(中略)

→ 0394 KF01 3月。

JF01は0388で韓国の学校が始まる月についてたずねている。KF01はその疑問に応じ、0394で3月に学校が始まるという情報を伝達している。以下、《応答》とする。

③自己情報修復行動（《自修》）⁴⁾

話し手自身の発話に欠けている情報を補足したり、間違った情報を訂正したりする行動である。この場合、話し手は自発的に情報を伝達しているが、

発話内容は最も伝達したい主要なものでなく、あくまでも相手の理解を助けるための付随的な情報である。

(5) 【K1】 自己情報修復行動

0506 KF01 <気に>{>}してないって感じ。

0507 KF01 もちろん難しいけど。

→ 0508 KF01 書くのは。

KF01は0507で日本語の文字体系について難しいと述べた後、その発話に欠けている、何を難しく感じるかについての情報を0508で補足し、聞き手の理解と手伝っている。以下、《自修》とする。

④他者情報修復行動（《他修》）

相手の発話に欠けている情報を補足したり、間違っただ情報を訂正したりする行動である。自身の発話ではなく相手の発話に対する行動という点で《自修》とは異なる。

(6) 【F1】 他者情報修復行動

0840 JF01 日本人もいい。

0841 KF01 うん<笑いながら>。

0842 JF01 <笑い>。

→ 0843 KF01 あ、日本人のほうがいい<かな>{<}。

JF01は0840で付き合いたいタイプに日本人も含まれるのかと確認要求をしており、KF01はその発話に対して日本人のほうがいいと、内容を訂正している。以下、《他修》とする。

情報伝達行動はこのように4つに下位分類することができる。話し手は、それぞれの下位行動を行う際に、異なったストラテジーを使用している可能性があるが、本稿では紙幅の都合上、上記の行動のうち《提示》のみを取り

上げる。

4.4. 情報伝達行動と伝達のモダリティ形式

本節では分析枠の最後として、これらの情報伝達行動にどのようなストラテジーが用いられるかを整理しておく。ストラテジーのタイプは、伝達のモダリティ、そのなかでもとくに、発話のなかで使用する終助詞によって端的に示される⁵⁾。金水（1991）の指摘にある通り、「知らせ」（本稿における情報伝達行動）には終助詞がない発話を用いることもでき、実際に本稿のデータを見る限り、情報伝達行動においてはこのような終助詞のない発話が主流である。本稿ではこれらの発話を無標の発話⁶⁾、終助詞を用いる発話を有標の発話とし、ここでは終助詞を用いる有標の発話を中心にして、それぞれの終助詞がどのようなストラテジーを担うものとして使用されるかを、先行研究を踏まえつつ整理する。

①ネ：積極的伝達ストラテジー

ネは、聞き手との連帯感を作り出し、聞き手を発話の中に組み込む「積極的伝達ストラテジー」を担う形式である。

神尾（1990）は、終助詞ネが必須となる場合と任意である場合とががあると述べている。ネが必須となるのは「現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報が同一である」（神尾1990：62）ことを条件とする。一方で任意のネは、このような条件が「満たされていない場合に、あたかも満たされているかの様に想定することにより、仲間意識または連帯感を表現して、発話に丁寧さを加える働きを持つ」（神尾1990：65）としている。伊豆原（1992）もネのコミュニケーション機能が「聞き手に話し手と同じ気持ち・情報を共有させようとする話し手の働きかけ」であると見た。ストラテジーの観点から、ネは聞き手を単に意識しているだけでなく、聞き手との関係にまで焦点を当てる伝達ストラテジーを持つと言える。

②ヨ：伝達表明ストラテジー

ヨは、情報を伝達することをことさら表す「伝達表明ストラテジー」を担

う形式である。

白川（1992）はヨの機能を、付加された文の発話が聞き手に向けられていることをことさら表明することであると述べた。伊豆原（1993）もヨとネと比較し、ヨを一方的な伝達形式であると述べている。具体的には、ネは聞き手を「発話内容の中に組み込まれた聞き手」として捉えるのに対し、ヨは聞き手を単なる「発話内容の聞き手」として捉えるとした。以上を踏まえば、ヨを用いた発話は、特に終助詞のない発話に比べて、聞き手に伝達していることを強く表明するという伝達ストラテジーを担うものとして使用されているといえる。

③ナ：消極的伝達ストラテジー

ナは、発話を直接伝達することを控える「消極的伝達ストラテジー」を担う形式である。

ナについてはあまり研究がなされていないが、その理由に関しては田窪・金水（1996）や宮崎（2005）で見ると、ネとナを機能的に区別しないという見方が主流であるためである。田窪・金水（1996）ではネ・ナについて、「ほとんど同じ機能を持つ助詞であるが、「ね」が必ず聞き手に対する語り掛けの場面で用いられるのに対し、「な」は語り掛けにも独り言にも使えるという点が異なる」と述べている。宮崎（2005）はこのことに対して、「本来独話的文脈で使用される、聞き手めあての機能のない「ナ」が対話的文脈にも出現する場合」（宮崎2005：140）があると、より詳しく述べている。以上から、ナはネとほとんど同じ機能を持つ形式で、基本的には用いられる文脈（聞き手目当て性の有無）が異なるものの、ナは独話的な発話のみでなく聞き手目当て性がある対話的な発話にも用いられることがある、とまとめられる。そして、本来独話的文脈に用いられやすいナを対話の場で用いることには、実際に情報を伝達していながらも聞き手に直接的・積極的に伝える行動は控えるという、情報伝達行動上のストラテジーとしてはたらきがあると思われる。ナもネと同様、聞き手への関係に焦点を当てる伝達ストラテジーを担うと言える。

5. 分析例：《提示》におけるストラテジー切り換え行動

本節では、4節で整理した枠組みを具体的な談話データに適用し、韓国人が情報伝達行動を行う際に使用するストラテジーを、使用した終助詞に注目して概観する。ここでは、話し手が主要情報を自発的に伝達する行動である《提示》を事例として、どのような伝達ストラテジーが用いられるか（5.1）、またそのストラテジーは相手によってどのように切り換えられるか（5.2）、その事例と共に示す。

最初に、インフォーマントが使用した終助詞の種類と数、および終助詞を用いていない発話数を確認しておく。表4のようになる。

表4 情報伝達行動の発話数

	【F1】	【C1】	【F2】	【C2】	【F3】	【C3】
無し	95	57	87	72	78	83
ネ	-	-	-	-	2	-
ヨ	-	7	-	4	4	1
ナ	-	-	2	-	-	-
計	95	64	89	76	84	84

5.1. 《提示》の発話に見るストラテジー

ここではインフォーマントの、終助詞を用いた発話とそのストラテジーを確認する。

まずKF01の《提示》について述べる。KF01は【F1】で終助詞を全く用いていないが、【C1】では終助詞ヨを用いている。まず【F1】の例である。

(7) 【F1】 [来日の時期について質問している]

0093 JF01 =え、じゃ来たばかり?。

0094 KF01 来たばかりなんですけど<笑いながら>。

0095 JF01 あ。

→ 0096 KF01 もうすぐ<終わります>{<}<笑いながら>。

JF01の0093の質問に対し、KF01は0094で《応答》をした後、0096で新たな情報を《提示》している。ヨが使用されてもいいような発話であるが、KF01は有標のストラテジーを使用していない。次に【C1】の例である。

(8) 【C1】 [お昼に行く店を探している]

0318 JC01 調べよ。

0319 JC01 「店名B」は…。

→ 0320 KF01 普通にご飯もある^ヨ。

0321 KF01 米<笑いながら>。

(8)ではJC01が0318-0319でお昼の店を調べようとしている。直前まで候補になっていた店がフランス料理、ラーメンであったことから、KF01は0320でご飯(米)という選択肢もあるという情報を《提示》している。その際、ヨを用いることによって伝達表明ストラテジーの使用が観察される。

次にKF02について述べる。KF02は【F2】でナを用いており、【C2】ではヨを使用する。まず【F2】の例である。

(9) 【F2】 [KF02を留学生交流会のバーベキューパーティに招待している]

0328 JF02 え、8月20に一。

0329 JF02 <<笑い>>{<}。

0330 KF02 <あー>{>}。

0331 JF02 バーベキューをしまーす。

→ 0332 KF02 できない^ナ。

0333 KF02 できない。

KF02は自分が所属している留学生交流会で行われるイベントにKF02を誘い、その詳細を0328、0331で伝えた。しかし、KF02は0332で行くことができないという情報を《提示》している。ナを用いることにより、消極的伝達ストラテジーを使用していることが分かる。次に【C2】の例である。

(10) 【C2】 [互いの英語実力について話している]

- 0726 KF02 私も、そんなに<英語>{<},,
 0727 JC02 <うん>{>}。
 → 0728 KF02 上手じゃない \square 。
 0729 JC02 嘘、<全然そんなことないよ>{<}。

KF02は自分の英語が上手ではないという情報を0728で《提示》している。その際にヨを用い、聞き手に対して伝達表明ストラテジーを使用している。

最後にKF03について述べる。KF03は【F3】でヨ、ネを使用し、【C3】ではヨを用いている。まず【F3】の例である。

(11) 【F3】 [それぞれが子供を教える仕事について話している]

- 0103 KF03 /沈黙 /1回だけ、1回じゃなくて実は2回ぐらい、そう
 ゆうー子供を教える、<バイト>{<},,
 0104 JF02 <うん>{>}。
 → 0105 KF03 したことあるんです \square 。
 0106 JF02 =<えー>{<}。

JF02が保育園で仕事をしたという直前の話を聞き、KF03も0103、0105で子供を教える仕事をした経験があるという情報を《提示》している。

一方、ネによる《提示》は(12)のような例である。

(12) 【F3】 [ピアノの練習について話している]

- 0250 KF03 なんかー、ちっちゃいときー、ちっちゃいときは、法
勉強してるんですけど、ちっちゃいときずっと両親が、
"この子音楽大学に進学<させよ"><{},,
0251 JF02 <へー><{}>。
0252 KF03 ってなったのでー、そうゆう勉強とかやってたんで,,
0253 JF02 <えー><{}>。
0254 KF03 あ、ちょっと。
→ 0255 KF03 ま、なんかやっぱ大変でした \square <笑い>。

この場合のネは、一連の発話の後、話を結ぶ機能をしている。つまり、KF03は断片的情報やナラティブの中心的情報を伝達する際には伝達表明ストラテジーを、ナラティブを終わらせる際には聞き手に気を配り積極的伝達ストラテジーを用いていると考えられる。次に【C3】の例である。

(13) 【C3】 [外国人は英語の授業を履修できないという規定について話している]

- 0492 KF03 でもたぶん英語<圏の人はあんまり、取らない><{},,
0493 JC03 <英語圏から来た人そんないない><{}><笑いながら>。
0494 KF03 と思う=。
→ 0495 KF03 =そう、みんなアジア人だ \square <<笑い>><{}>。

KF03は英語を母語としない外国人まで英語の授業が履修できない状況に対して文句を言っている。その際、0495でヨによる伝達表明ストラテジーを用いている。

5.2. 韓国人日本語学習者のストラテジーの切り換え

5.1節で韓国人が情報伝達行動においてどのようなストラテジーを用いて

いるかを整理した。次に、個々の話者と場面ごとに、その切り換えの様子がわかるようにまとめる。表5のようになる。

表5 《提示》における伝達ストラテジー

	KF01	KF02	KF03
初対面場面	事例なし	消極的伝達	伝達表明 (中心的情報) 積極的伝達 (ナラティブの結び)
友人場面	伝達表明	伝達表明	伝達表明

表5を見ると、初対面場面より友人場面で共通したストラテジーの使用が見られる。

まず、初対面場面の伝達ストラテジーには、ばらつきがある。その要因には個人の性格差もあると思われるが、日本滞在期間が影響している可能性がある。日本滞在期間が2年以上のKF02とKF03は、方向性は異なるが、いずれも初対面場面において聞き手との関係に焦点を当てたストラテジーを使用している。一方、日本滞在期間が相対的に短いKF01に関しては、初対面場面において有標のストラテジーをとっていない。終助詞によるストラテジーではなく他のストラテジーを用いている可能性もあるが、本稿ではそれ以外のストラテジーの使用に関しては触れることができなかったため今後の課題にしておきたい。

一方、友人場面では、全員が伝達表明ストラテジーを用いている。朴(2001)は不満表明を例に、韓国人の言語行動の指向性は対人関係維持より目的達成指向が強いことを明らかにしている。また、このような傾向は許(2010)などでも指摘されている。友人場面における伝達表明ストラテジーの使用はまさに韓国人の目的達成指向の結果ということが出来る。

以上、友人場面で明確に現れたように、韓国人は言語行動を行う際に目的達成を重視するが、それは常に維持されるのではなく、場面によって切り換えられるということが分かった。特に、最も日本滞在期間が長いKF03にお

いては、初対面場面で一連の情報を並べる際に伝達表明ストラテジーを、それを結びあげる際に積極的伝達ストラテジーをとというふうには、目的達成を重視するとともに相手との関係をも意識していることがうかがえる。

6. 今後の課題

本稿では韓国人日本語学習者が情報伝達行動、特に《提示》を行う際、場面によって伝達ストラテジーを切り換えることを明らかにした。しかし、本稿のデータは十分とは言えず、今後データが蓄積された場合、分析枠に一部修正を加える必要がある可能性がある。

韓国人日本語学習者のストラテジーの切り換えの特徴をより明らかにするためには日本語母語話者や他言語母語話者のデータを収集し、比較する必要がある。

[文字化記号]

。	発話文終了	,,	発話文非終了
?	疑問文	" "	引用文
、	①慣例通りの読点	(発話)=	間がほとんどない
	②短い間	= (発話)	
/沈黙 /	1秒以上の間	…	言い淀み
【 【	割り込み	< >{<	オーバーラップ
】 】		< >{>	
< >	笑いの情報	[↑]	イントネーション
#	聞き取り不能	[]	固有名詞

[注]

- 1) インフォーマントはKF (K = Korean, F = Female) とし、談話収録を行った順に 01 から 03 まで番号を付した。談話協力者は初対面場面の協力者を JF (J =

Japanese, F = Formal)、友人場面の協力者をJC (J = Japanese, C = Casual)とした。また、それぞれ参加した談話のインフォーマントと同じ番号を振った。ただし、【F2】と【F3】の談話協力者は同一人であるため、【F3】でも【F2】と同じくJF02とした。

- 2) サール (2006) は発語内行為の分類の際、言葉を世界に合致させるか (word-to-world)、世界を言葉に合致させるか (world-to-word) に大きく二分し、この相違を「適合方向」としている。
- 3) たとえば、次のような意見の伝達の発話例である。
 - 0821 JC01 なんかすっぴんはこれやねんけど。
 - 0822 JC01 あ、でも別に普通に可愛くない?。
 - 0823 KF01 うん、可愛いよ。
- 4) ③自己情報修復行動と④他者情報修復行動は、話し手が誰の情報に補足、修正するかによる命名である。
- 5) 伝達のモダリティには丁寧さのモダリティと伝達態度のモダリティがあり、伝達態度のモダリティは「よ」や「な」のような終助詞によって表される (日本語記述文法研究会編 2003: 7)。なお、金水 (1991) や宮崎 (2005) も終助詞が情報伝達行動に関わっていることを指摘している。
- 6) 無標・有標は形式的問題であり、形式的に無標の発話は必ずしもストラテジーを持たないとは限らない。ただし、本稿は終助詞による有標の情報伝達行動に焦点を当てるものであり、無標の発話のストラテジーについては触れない。

[参考文献]

- 伊豆原英子 (1992) 「「ね」のコミュニケーション機能」『日本語の研究と日本語教育』, pp.159-172
- 伊豆原英子 (1993) 「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80, pp.103-114
- 宇佐美まゆみ (2005) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/mojika.pdf> (2019/07/15 最終接続)
- 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編 (2002) 『阪大社会言語学研究ノート』4
- 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編 (2003) 『阪大社会言語学研究ノート』5

- 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編 (2004) 『阪大社会言語学研究ノート』6
- 大津友美 (2007) 「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合—」『社会言語科学』10(1), pp.45-55
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀 (1998) 「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学研究紀要』44(2), pp.389-397
- 岡崎渉 (2015) 「上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト—インフォーマルスタイルに着目して—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』64, pp.147-156
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 金水敏 (1991) 「伝達の発語行為と日本語の文末形式」『神戸大学紀要』18, pp.23-41
- サール, J. R. (2006) 「発語内行為の分類法」山田友幸・高橋要・野村恭史・三好潤一郎訳 『表現と意味』誠信書房 (Searle, J. R. (1975) A classification of illocutionary acts. *Language and Society*. 5(1), pp.1-23)
- 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77, pp.36-48
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3), pp.59-74
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4』くろしお出版
- 朴承圓 (2001) 「韓国人日本語学習者の言語行動の指向性に関する一考察—不満表明を例に—」『言語科学論集』5, pp.73-84
- 許明子 (2010) 「日本語と韓国語の聞き手の私的領域に関する言語行動—韓国人日本語学習者と日本語母語話者の言語行動に関する調査を通して—」『筑波大学地域研究』31, pp.25-44
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press
- Kite, Y. (2001) English/Japanese Codeswitching Among Students in an International High School. In Mary Goebel Noguchi and Sandra Fotos (eds.) *Studies in Japanese Bilingualism*. Buffalo, N.Y.: Multilingual Matters Ltd, pp.312-328
- Poplack, S. (1979) Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino en español. *Linguistics*. 18, pp.581-618

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Shift of Strategies for Information Transmission Act between Situations
of Korean Japanese Learners:
A Framework for Analysis

Doyoung KIM

Keywords : Shift of Strategies, Transmission Strategies, Information Transmission Act, Sentence-Final Particles

Research on the switch of language has so far covered a wide range of levels such as language, dialect, and style. On the other hand, people not only switch forms but strategies for performing speech acts as well.

In order to consider a framework for analyzing such shift of strategies, this paper used information transmission act of Korean Japanese learners as an example and analyzed how they shift strategies to perform the speech act between situations of first encounter and with friends.

This paper considered the sentence-final particles *ne*, *yo*, and *na* which are the forms of transmission modality to analyze the information transmission act. Each of these sentence-final particles are considered a formal expression of a strategy for information transmission act in this research. In other words, *ne* is a formal expression of “positive transmission strategy”, *yo* is “transmission expression strategy”, and *na* is “passive transmission strategy”.

With this framework, this paper analyzed that Korean Japanese learners tended to use strategies that focused on the treatment of the listeners (positive communication strategy, passive communication strategy) in the first encounter situations. On the contrary, transmission expression strategy is used in the situations with friends to emphasize the goal achievement more than the listener’s treatment.